第２期堺文化芸術推進計画の目標の達成度、
効果等に対する検証・評価について

答申書

（令和３～令和６年度〈４カ年〉に実施する評価の１年目）

令和４年３月

堺市文化芸術審議会

はじめに

堺市における文化芸術振興の基本理念などを定めた「自由都市堺文化芸術まちづくり条例」（以下「条例」という。）に基づき策定した「第 2 期堺文化芸術推進計画」（以下「第 2 期計画」という。）を踏まえ、令和 3 年 7 月 1 日、同計画の目標の達成度、効果等に対する検証・評価について、諮問を受けた。

第 2 期計画では、前期計画の結果やその後の社会情勢の変化から生じた課題に対応するため、新たに、「重点的方向性 1：文化芸術とともに生きる」、「重点的方向性 2：文化芸術で子どもたちを育てる」、「重点的方向性 3：多くの人に魅力を伝える」の 3 つの重点的方向性を設定している。同計画の評価に当たっては、各重点的方向性につき 1～2 事業を選定し、当該事業の実施主体へのヒアリングや現場の視察等を通して、同計画の骨子である重点的方向性について有効な施策が実施できているかの検証・評価を行うものとする。

また、前期計画においては、5 年間の計画期間において、条例に定める 11 の基本的施策に関する事業を各年度に割り振って検証・評価を行ったことから、計画期間中における評価結果を踏まえた事業見直しが不十分であった。その反省を受けて、今期計画では、毎年度全ての重点的方向性に関する事業を視察し、検証結果を基に次年度に向けた事業見直しを行うこととする。

評価の一年目である令和 3 年度において、堺市文化芸術審議会では、諮問に基づき、以下のとおり、各重点的方向性の進捗確認に最も効果的と判断される各々2 つの事業を選定した。

○重点的方向性 1：文化芸術とともに生きる（文化施設実施事業、公益財団法人堺市文化振興財団が実施する社会包摂型事業）

○重点的方向性 2：文化芸術で子どもたちを育てる（さかいミーツアート、アートスタートプログラム）

○重点的方向性 3：多くの人に魅力を伝える（与謝野晶子顕彰事業、堺 アルフォンス･ミュシャ館作品企画展示事業）

事業の実施に当たっては、堺市の文化芸術の創造発展を支える事業を実施する推進母体である公益財団法人堺市文化振興財団が、アートマネジメントに関する専門性やネットワークなどを活かし、芸術家、堺市社会福祉協議会や堺アーツカウンシルといった様々な主体と連携しながら、重点的方向性 1 に係る事業としては「社会包摂型事業」を、重点的方向性 2 に係る事業としては、「さかいミーツアート」、「アートスタートプログラム」を、重点的方向性 3 に係る事業としては「堺 アルフォンス･ミュシャ館作品企画展示事業」をそれぞれ実施している。

なお、重点的方向性 2 に係る「アートスタートプログラム」及び重点的方向性 3 に係る「与謝野晶子顕彰事業」については、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う事業中止により今年度の視察は中止となった。しかし、その他の事業については、審議会において可能な限り視察し、調査報告について討議を行い、次のとおり結論を得たので、堺市長に答申するものである。

本答申の趣旨に沿って、市は第 2 期計画の目標達成に向けて、引き続き着実かつ効果的な事業及び施策の推進を図るとともに、必要に応じて、事業の実施主体に対する指導等の措置を講じるよう要望する。

会長	中川　幾郎
会長代理	藤野　一夫
委員	柿本　茂昭
	さいとう　しのぶ
	菅野　陽子
	田辺　竹雲斎
	永島　茜
	坂東　亜矢子
	弘本　由香里

第２期堺文化芸術推進計画

基 本 目 標
■自由で心豊かな市民生活の実現
■都市魅力の創造

基本目標の実現へ

基本的施策

市民文化					共通			都市文化		
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
文化芸術活動を行う環境の整備	文化芸術に親しむことができる環境の整備	学校教育における文化芸術活動の充実	将来の文化芸術を担う子どもたちの育成	文化芸術を支える人材の育成	文化施設の活用	多様な分野との連携	歴史文化資源の継承及び活用	魅力的なまちの景観の創出	国際的な文化芸術の交流	経済活動との連携
条例第9条	条例第10条	条例第11条	条例第12条	条例第13条	条例第17条	条例第14条	条例第15条	条例第16条	条例第18条	条例第19条

重点的方向性１
文化芸術と ともに生きる

○重点的施策１－１：文化芸術を通じた社会的課題の解決
○重点的施策１－２：すべての人が文化芸術を享受できる機会の充実
○重点的施策１－３：市民の文化芸術活動の機会の提供

＜具体的取組＞
・すべての人が文化芸術を享受できる機会の充実
・「堺アーツカウンシル」の創設による施策の推進
・地域文化会館の地域における文化芸術拠点としての機能強化
・コミュニティのつながりによる地域活性化の実現

重点的方向性２
文化芸術で 子どもたちを育てる

○重点的施策２－１：未来の文化芸術を担う子どもたちへの文化芸術に触れる場の提供
○重点的施策２－２：子どもたちの育成に寄与する芸術家の育成

＜具体的取組＞
・市内学校園での文化芸術鑑賞、ワークショップ等の実施
・意欲のある子どもが更に興味を深めることができる活動の場の提供
・子どもと芸術をつなぐ人材の育成
・行政、芸術家と子育て機関、学校等との有機的な連携

重点的方向性３
多くの人に 魅力を伝える

○重点的施策３－１：堺の文化資源を通じた市民意識の醸成
○重点的施策３－２：市外、国外の人々への堺の文化資源の魅力発信

＜具体的取組＞
・歴史文化資源を活用した市民意識醸成、情報発信
・地域の伝統文化や文化財を活用した都市の活性化
・未来の歴史文化資源の発掘、育成
・フェニーチェ堺による都市魅力の発信

各重点的方向性に係る視察及び評価について

■重点的方向性１　文化芸術とともに生きる

重点的方向性		評価指標	現状値（令和2年度）	目標値（令和7年度）
1	文化芸術とともに生きる	文化施設※1利用者数	471,167 人／年	1,500,000 人／年
		地域文化会館における地域マネジメント機能の構築	―	機能構築
		社会包摂型事業の新規実施	―	事業実施

※1　フェニーチェ堺（堺市民芸術文化ホール）、堺市立文化館、堺市立栂文化会館、堺市立西文化会館、堺市立東文化会館、堺市立美原文化会館、堺市立中文化会館

評価対象	文化施設実施事業
実施主体	堺市、指定管理者（公益財団法人堺市文化振興財団、大阪ガスビジネスクリエイト株式会社）
事業概要	市民に対する質の高い文化芸術の鑑賞機会の提供及び市民文化活動の場の提供を目的として、各文化会館において施設の管理運営及び文化芸術振興事業を行う。
調査概要	日程：令和 3 年 10 月 24 日（日） 内容：「舞太鼓あすか組」の視察 場所：西文化会館
委員からの評価	＜事業の評価について＞ ● 文化芸術振興事業としては本年、コンサート・各種発表会・展示・舞踊体験教室・読書会など参加型・鑑賞型・普及型の三形態に分かれ 43 の事業がリストアップされている。（コロナのため中止・延期・未定も含む）6 階の掲示板にもいろいろなサークルの案内が貼られ、活発な活動が思われた。当日の公演のオープニングを飾った「三味線」（3 名）と「和太鼓」（12 名）の演奏は、はそれぞれウエスティ文化講座の受講者である。特に「和太鼓」は、講師の舞太鼓あすか組の指導を受け、コロナ禍の中Ｗｅｂもうまく活用しながら楽しく演奏していたのが印象的だった。（去年はコロナのため中止） ● 堺市は、地域の伝統的な祭りなど行事が根付いており、子どものころから参加する貴重な習慣が残っていると考えられる。そのような環境にあって、本公演は和太鼓を中心とする邦楽のエンターテインメントとしての可能性を提示するものであった。 ＜留意点＞ ● 本市にはフェニーチェを含め 6 つの文化施設・会館があるとのことであり、各館それぞれの活動の充実はもちろんだが、他の施設との連携強化に努めるべきではないか。それぞれの活動内容・活動時期の把握、それぞれが抱える問題点

	とその解決のための具体的提案など、交流・関係の深化が望まれる。本会館は文化振興財団が所管する他の館と違い、指定管理者が大阪ガス・ビジネスクリエイトであるだけに余計そのことが必要ではないか。 ● 今回は、かなりエンターテインメントとしての性質が前面に打ち出された公演であった。そのこと自体は評価できるが、地域の文化芸術活動を発信していく文化会館として、地域の伝統的な行事とも関連を持たせられるような企画になると、より深みのある内容にできるのではないだろうか。
事業の重点的方向性への寄与	● 本区に伝わる「だんじり祭り」の伝統を継ぎ、次代へもつないでいくため、親しみやすい「和太鼓」の演奏を体験し、プロの指導を受けながら実際にコンサートの場に立つことは教室で学ぶ市民にとってとても貴重な文化体験になるだろう。また、太鼓の奥深さや多彩さを意欲的に追及している「あすか組」のダイナミックな演奏に触れることで地元への愛着・理解が深まることも期待され、「文化芸術とともに生きる」という方向性に大いに寄与すると考えられる。 ● 前半には講座受講者による発表も組み入れてあり、出演した受講者にとっても観客にとっても、かなり身近な存在であることが再認識され、文化芸術とともに生きるという目的に適うものであると思われた。 ● 就学支援世帯への支援事業を実施しており、本公演もその対象となっていることは、大いに評価できる。子どものころから、様々な舞台芸術に直に触れる機会を拡げるものであり、文化芸術とともに生きることを実現させる取り組みである。本公演についても、観客がエンターテインメントとして楽しむことは、文化芸術を身近に感じる方策としては有用であると考えられた。

評価対象	公益財団法人堺市文化振興財団が実施する社会包摂型事業
実施主体	公益財団法人堺市文化振興財団
事業概要	令和 3 年度は、以前から実施してきた「まちなかコンサート」、「まちなかワークショップ」を社会包摂の趣旨に即した内容で実施する。
調査概要	日程：令和 3 年 11 月 13 日（土） 内容：まちなかワークショップ（″音楽造形″鉄琴作成と合奏ワークショップ） 場所：英彰ふれあいセンター（英彰こども食堂ここなら）
委員からの評価	＜事業の評価について＞ ● 既に地域活動が根付いている地区と聞いた通り、子どもたちがスムーズに活動できていた。子ども食堂の活動が月 1 回の弁当配布となっている中、鉄琴をつくることで、対面での関わりが重要であると感じられた。活動には造形芸術、音楽、非言語的コミュニケーションの要素が取り入れられており、また外部の大人の目線にも配慮されていた。子どもたちは、他者との関わりを求めて参加しているのであり、意義ある活動であると考えられる。 ● 子どもたちの居場所、いわば人権を守りそだてる場として運営される子ども食堂において、食を通したコミュニケーションだけでなく、アートを通したコミュニケーションのチャンネルが開かれることによって、子どもたちの心の世界が広がり、表現という人権にとって極めて重要な領域を涵養していくことにつながる。

	● 社会包摂型のアウトリーチのあり方として、地域に根差し多様な主体が関わって展開されている福祉系の事業と、アーティストが協働することによって生み出される社会的インパクトは大きい。 ● 堺市新進アーティストバンクに登録する複数分野のアーティストが連携し、子ども食堂スタッフ・社協スタッフと文化振興財団スタッフと協働で、プログラムを企画・実施された点も評価に値する。 ＜留意点＞ ● 必ず改善すべき事柄は、見当たらなかった。子ども食堂の活動が整備されてきている一方で、極めて困難を抱えているような事例に、アットホームで緩やかな関わり（中にはアレルギーや安全管理、衛生の問題などもあるかもしれない。）を持続的に行うことは容易ではないと思われた。本活動についても、継続的な関わりがどのくらいの頻度で確保されているのか、またそれによって、子どもたちの自己肯定感などが高まるのかを見守る必要があると考えられる。 ● 関係者が熱心に打合せや準備、リハーサルを重ね、本番を迎えられていることが伝わり、子どもたちにとって貴重な体験となったことは確かだと思うが、一方で、プログラムがタイトに詰め込まれていたため、子どもたちが与えられた作業をこなす方向で、受け身になってしまいやすい点が、やや残念であった。例えば、導入でアイスブレイクの時間を設ける工夫や、子どもたちが互いの表現に関心を向け、相手の気持ちを想像するといった時間も設けられるとよかったのではないか。子どもたちとスタッフの対話も、もう少し豊かに展開されるとよかったのではないか。そのためには、全体の時間配分など、場合によっては、つくる時間と演奏する時間を午前・午後に分けるとか、別の日に分けるとか、大きなフレームの見直しも必要かもしれない。また、こうしたチャレンジングな連携事業を支える、コーディネートやオペレーションのあり方として、負担を軽減しつつ、持続性と質を担保できる仕組みを検討していく必要もあるだろう。
事業の重点的方向性への寄与	● 子ども食堂という福祉的要素のある活動に、文化芸術として継続的にかかわることで、文化芸術と共に生きていくことにつながるとは思われる。但し、どのような文化と芸術とともに生きるのかなど、本事業として指し示す文化芸術とは、具体的に何をさすのか、議論の余地があると考えられる。 ● 堺市文化振興財団が担う社会包摂型事業のあり方として、社会福祉協議会と連携して地域に入っていく方法は、さまざまな困難を抱えている人々や支え手となっている人々など、幅広い対象にリーチすることができ、本質的な意味で文化芸術とともに生きること、アウトリーチの実現の可能性が見出せる。

■重点的方向性２　文化芸術で子どもたちを育てる

重点的方向性		評価指標	現状値（令和2年度）	目標値（令和7年度）
2	文化芸術で子どもたちを育てる※2	芸術家の学校への派遣割合（計画期間における派遣校数/全小中学校数）	44%	80%
		事業体験後、児童が文化芸術に興味を持てたと答える割合	82%	90%
		事業体験後、学校側が子どもたちに良い影響・変化があったと答える児童の割合	87%	90%

※2　文化課所管の事業を主に指標に用いています。事業の推進にあたっては、教育委員会の協力を得て実施しています。

評価対象	さかいミーツアート　（小中学生対象アウトリーチ）
実施主体	公益財団法人堺市文化振興財団
事業概要	小・中学校等で多様なアートプログラムを実施することで、次代を担う子どもたちにアートに出会ってもらい、新たな経験を通じて、豊かな心と感性を育むことができる環境づくりを推進する。
調査概要	◇さかいミーツアート（造形） 日程：令和３年 10 月 13 日（水） 内容：彫刻家 本多紀朗氏指導によるランプシェード製作 場所：堺市立平尾小学校 ◇さかいミーツアート（音楽・中学生対象） 日程：令和３年 10 月 18 日（月） 内容：ヴァイオリン：大阪交響楽団　吉岡　克典(ピアノ：吉岡　麻梨)による音楽授業 場所：堺市立大泉学園 ◇さかいミーツアート（音楽・小学校低学年対象） 日程：令和３年 10 月 25 日（月） 内容：ヴァイオリン:大阪交響楽団　村上　慈（ピアノ：原　真奈美）による音楽授業 場所：堺市立福田小学校

委員からの評価	＜事業の評価について＞ 〇造形 ● すぐに作品を作り始めるのではなく、しばし粘土と触れ合い、楽しむということを体感させ、その重要性を伝えておられたことに感心した。ストレスなく取り組めたことで、実際に完成した作品を前にした子どもたちの非常に満足げな表情が印象的だった。時間内に、スムーズに陶芸という芸術に取り組めた素晴らしい授業だと感じた。 ● 講師が経験豊富であり、子どもたちが作ることを楽しみながら、陶芸を学んでいる。始めに「失敗してもいい、小、中学時代に沢山失敗をすることが大人になった時の経験となる。楽しんでアートを制作することを続けることで、美術が好きになる。良いものを作ろうとせずに楽しんでつくる」というようなコンセプトで授業に向かっているため、全員がリラックスしている印象を受ける。 ● 理想的なアーティストの授業。校長先生も文化やアートに理解があるため、積極的に学校が取り組んでいる。 ● 大阪芸術大学の院生２名が助手に来ていたが、若いアーティスト育成も兼ねていることが理想的。院生がアート活動をしながらアーティストバンクに登録して、堺市展などの公募展に出品する。またさかいミーツアートの助手をして経験を積む。堺のアートシステムを使いながら、大学生がアート活動をできるような仕組みが考えられている。 〇音楽（中学生対象） ● 出演者の技量（音楽／プレゼンテーション面ともに）が、非常に高いため、とても評価できる。鑑賞した中学生たちの反応をみても、とても充実した取り組みであると考えられる。ヴァイオリンやピアノと日常的に馴染みが少ない（或いは日常的に馴染んでいる場合も含めて）生徒が、どのような感想を得たのか、一般的なアンケートをより深めたヒアリングを行ってみたいとも思われた。また、条件が許せば、保護者などの参加を促すことで、帰宅後に感想を伝え合う事も期待できる。家族で芸術体験を共有することにつながり、芸術鑑賞がより身近になるのではないだろうか。 ● プロのアーティストの生演奏を近くで聴ける機会はやはり貴重であり、子どもたちが芸術文化に身近に触れられる同事業の重要性を再認識できた。50 分間に音楽への興味を喚起する要素を詰め込んだ良質のプログラムで、演奏する楽曲に近年のヒット曲を入れ込むなど、若い世代に訴えかける工夫が見られた。ヴァイオリンとピアノによる音楽の鑑賞だけでなく、生徒の一人に音符を並べ替えさせて作曲を体験させたのも良いアイデアで、教室内に一体感が生まれる時間となっていた。 ● 担当のアーティスト（大阪交響楽団 吉岡克典氏・吉岡麻梨氏）が有する技術や芸術性の高さはもちろんだが、表現を通して人間的な魅力が伝わることによって、生徒たちがそれぞれに生きることや表現することの価値について、体感することができる貴重な機会になっていると感じた。 ● 音楽が得意な生徒も、そうでない生徒も、授業の内容に興味を持つことができ

るように、生徒たちに身近な話題や今日的な産業や文化との関連性も示すなど、事前の準備が丁寧に行われ、50 分という限られた時間でのプログラムが練り上げられており、他のアーティストの参考にもなる。

○音楽（小学校低学年対象）

- 事業内容としては、アーティストからの一方通行ではなく、事前に学校側とヒアリングし、それに基づいてプログラム内容を決めていくことで、子ども目線の内容となり良いことだと思う。プログラムを受け身ではなく、参加・体験することができていたのは評価できる。子どものころに体験したこと、触れたものは、脳のどこかで記憶しているので、その時の子どもの反応がどうであれ、非常に大切な取り組みであるので、実施校が増えていくことが望ましい。時間も限られている中、またコロナという状況の中で、工夫しながら進めていたと思う。
- 視察した 4 時間目の生徒たちは非常にノリが良く、全体に活気のある時間だった。ヴァイオリニストは、小学校のアウトリーチに慣れているようで、プログラムは概ね無難なものであった。特に弦楽器の比較や、ヴァイオリンの分解による構造の紹介は、生徒の興味を強く惹きつけており、効果的であった。生徒の耳元まで近寄って「生音」の迫力や繊細さを聞いてもらう工夫も良かった。

＜留意点＞

○造形

- さかいミーツアートを利用して、子どもたちにアートに触れる機会を増やすべきなので、各学校へのアピールを増やすべく、実施校の写真や、ウエブ上での動画など、先生方の知る機会を増やしていただけたらと思っている。また、PTA などにも働きかけ、保護者サイドからの学校への働きかけを利用してもよいのではと感じた。今、コロナという状況もあるかとは思うが、各学校に伝える機会と手法をご検討いただけたらと思う。
- 講師の力量によって大きく授業内容が変わってくると考えられるため、講師の教育システムをつくることも重要。

○音楽（中学生対象）

- せっかくのアーティスト派遣事業だが、ここ 3 年、小中 135 校への案内の中で応募校数が 20 数校にとどまっているのが残念だ。コロナ流行の影響はあろうが、令和元年度の数も変わりないことを考えるとそれだけが原因ではないだろう。事前に小中の校長会で事業内容を説明しているとのことだが、堺市教育委員会とのより緊密な連携、新聞の地方版への掲載依頼やマスメディアを通じての広報活動、ＳＮＳ等を活用しての口コミ的な活動などの諸点が考慮されるべきだと思う。
- 専門的に見ると出演者の技量が極めて高いことは容易に理解できるが、仮に日常的にヴァイオリンやピアノに接していない場合に、今回鑑賞した出演者が、ヴァイオリン奏者として、どんな活動をしていて、実際にどこに行けば演奏を

	聞けるのか、といった前後の導線づくりまで展望しても良いのではないか。 ● キャリア教育の視点については、生徒の現状に合わせて、伝えたいメッセージを明確にしていくと、生徒にとってより実りのある内容となるのではなかろうか。例えば、ヴァイオリニストという専門的な道を選択でき得る（実力がないと選択できない現状があるので）ために行った努力などについても知ることができれば良かったのではないかと感じた。 ● 堺市では、アーティストに対しても研修を行うことで、育成プログラムを構築しているとのことで、「堺モデル」のようなプログラム化をめざして欲しい。子ども（及び保護者）とアーティスト（或いは関係団体など）と学校・団体（担当教諭など）の三者が、継続的な交流を行えるよう、1 回のアウトリーチ体験から、その先の深化に繋げられるような道筋の提案をしても良いのではないかと思われた。例えば、㈶地域創造の「おんかつ」に類似するが、関連する演奏会などの割引や限定席の確保等も考えられる。 ● おそらく、これまでに各所で何度も行われてきたプログラムだと思われる。すでに完成したパッケージ化されていて、学校側の要望等があった際、なかなか取り入れにくいのではないだろうか。よく練られた内容ではあるが、生徒全員が実際に参加できるようなものがあると、なお良いように思った。 ● 堺市文化振興財団の方も話していたが、質を重視するため、数がこなせないのが課題とのこと。令和 3 年度は応募校数 23 校のうち、実施校数は 15 校という。やはり応募があった全ての学校で実施されることが望ましい。 ● 今年度から、財団の専門スタッフがコーディネートを担うことによって、事業の目的にかなうプログラムづくりが模索されているが、一方で目標値に対して、コーディネートのマンパワー不足が懸念されている。持続的・発展的なコーディネートをいかに可能にしていくか、たとえば参加アーティストの研修や模擬授業等の機会を設け、モデルを共有するなど、アーティスト自身が積極的にＰＤＣＡを回していけるような仕組みを検討していく必要があるのではないか。 ○音楽（小学校低学年対象） ● 新規校の実施が少ないのが残念。現状では授業数が限られている中で、文化芸術に時間を割くのは難しいかもしれないが、なんとか広げていってほしい。このすそ野が広がることで、子どもが芸術に触れあう機会が増えていくと思うので、まずは多くの教員に文化芸術の大切さを理解してもらう必要がある。図工や音楽、体育（ダンス）の授業の一環として、教育委員会と協力して取り入れていけないだろうか。 ● 音楽とバレエ、音楽と絵などをミックスした内容も子どもが興味を持つうえでいいと思う。時間が 45 分と限られている場合は難しいかもしれないが、興味を持つ学校が新たにでてくるかもしれない。さかいミーツアートの事業は、全体的にいい取り組みだと思う。若手アーティストに向けた研修プログラムも導入され、若手アーティストを積極的に派遣することで、アーティストを育て、子どもたちにとっても年齢が近ければ親しみわきやすいだろう。多くの学校に

	積極的に受け入れてもらえるよう工夫をし、子どもが文化芸術に触れる機会を与えるとともに、アーティストを育成できれば、堺の文化芸術の発展に期待がもてる。 ● 「文化芸術で」子どもたちを育てることに鑑みると、提供する内容は更に工夫が求められる。今回は、恐らく「親しみやすさ」を考慮して、アニメソングなどが演奏されたが、提供者側は迎合せず「文化芸術」作品を噛み砕いた内容を子どもに提供するほうが、本施策の趣旨に沿うのではなかろうか。そのためには、何を目的とするのかを明確にし、体系的な学びとなるような工夫が求められる。少なくとも、学校の協力による前段階の授業、そして本当の演奏会に参加する体験など、場当たり的な１回限りの活動ではなく、線としてつながって、発展していけるようにするべきである。長期的な視点では、堺市の他の音楽活動やひいては芸術活動を視野に入れて、堺全体の文化芸術のなかでアウトリーチがどのような位置づけにあり、どの部分を担うのかを議論する必要があろう。例えば、将来の観客になりうる、文化芸術を評価できる力（感性）の育成などは、便利な現代社会であるからこそ、大切にするべき観点であると考えられる。 ● 学校側の受入れの容易さもあって、音楽分野が圧倒的に多い状況にあるが、造形やダンスや演劇など、多様な分野のプログラムの提供体制も整えていけるとよい。 ● クラシックの子どもアウトリーチやインリーチでアニメソングを多用する傾向があるが、その功罪についてしっかり検証し、議論すべきだろう。私は数多くの子どものためのコンサートに関わってきたが、大原則として、子どもが良く知っているアニメソングは使わないことを徹底してきた。自己内再生産では新しい世界は開かれない。何を目標にアウトリーチを行うのか？その哲学を明確にする必要があるだろう。保護者はアンケートで、もっと子どもの知っている曲を入れて欲しいと、必ず書いてくるが、子どもの感受性は大人が考える以上に豊かで間口が広い。演奏家も、「受けやすい」楽曲に迎合しがちである。大人の意見（先入観）で子どもの能力を制約してはならないだろう。エンタメの普及のためにクラシックの子どもコンサートがあるのではない。エンタメの世界には、それ独自のプロの見せ方、聴かせ方があり、その素材だけをクラシックが利用して敷居を下げたつもりになっていても、実際にはクラシック独自の世界への「感性」の扉は開かれないだろう。このディレンマを直視して、「本質に触れる」プログラムとメソッドを再構築してほしい。
事業の重点的方向性への寄与	**〇造形** ● 陶芸という作品作りに触れ、そういったことを学ぶ大学があり、彫刻家や、大学での教員といった職業についても学べたことは、子どもたちにとって、大きな経験だったと思う。また、焼き上がって後に、本多先生が来られ、詳しく職業のお話などをされるとのこと、完成した作品を前にさらに興味を持つことができるので、非常に良いと思う。 ● 今回助手をされていた学生さんも経験を積み、やがてはこういった活動に参加されていくという継承にもなる。そうしてさらに広がっていくことを願う。今

	後もあらゆる講師陣の発掘や育成も必要だが、繋げていくということも必要と感じた。今回の授業は、陶芸という芸術に触れることもでき、将来の参考にもなる大学や職業についても学べる非常に意義ある時間だったと思う。 ○音楽（中学生対象） ● コロナ禍のため子どもたちが芸術・文化活動に直接触れ、体験する機会がますます減っていることを考えても本事業の重要性・必要性が分かる。事後のアンケートでも生徒たち・学校側の満足度はかなり高い。十分に重点的方向性への寄与は果たせていると思う。実施校への事前ヒアリングの強化や若手アーティストの育成・支援などの堺市文化振興財団の方針も全面的に賛成である。限られた予算の制約の中でさまざまな困難はあろうが、いっそうの工夫を期待したい。 ● 現状で十分に子どもたちを育てることにつながっているとは考えられる。しかしながら更に「芸術文化で」の部分で、子どもたちの育ちに対して、芸術文化は一体何を担っているのかを関係者が議論を尽くし、目標を共有して、各活動が点ではなく線として繋がるように関わると、市の芸術文化環境に対して、より効果が高まると考えられる。 ● 音楽を通して芸術文化への関心を高めることに加え、吉岡克典氏が人生の先輩として生徒たちに自分らしく生きることの大切さについて話すなど、色々な面から「子どもたちを育てる」ことにつながる事業だと思われた。生徒たちが前のめりの姿勢で鑑賞し、吉岡氏の問いかけに積極的に答えていたのは、事業に魅力があった証だろう。音楽に興味が湧いた人は、昼休みの時間に音楽室へ行けば、楽器に触れられる時間も設けていたようで、これも生徒たちにとって情操教育につながる貴重な体験となったのではないか。 ● 今回視察した授業単体については、優れた効果を発揮されていたが、事業全体の重点的方向性への寄与を考えると、市内すべての小中学校数に対して、応募校の偏りや実施校数に限りがある点は課題であり、可能な限り多くの生徒たちが同事業を経験できるように、運用上の工夫が必要ではないか。 ● 受入れ校側は、現状では音楽の授業の時間か、総合的学習の時間を活用している例が多いとのことであった。今後、美術や書道、家庭科、体育（ダンス）、国語や英語（脚本や朗読等）の授業等の活用の可能性もゼロではないと思うが、それらを可能とするためには、指導要領の中のどこに位置づけることができるかなど、教育現場とともに考える必要があり、校務で大変多忙な中でも関心の高い先生方がいらっしゃれば、協働の可能性を探っていけるとよい。 ○音楽（小学校低学年対象） ● 子どもの頃に体験したことは、必ず心のどこかに残っているので、多くの子どもが文化芸術に触れることができるように学校を通じて体験できることはとても大切である。いつもの場所で、本物の文化芸術に触れることは、美術館や展覧会・ホールに行って鑑賞した時とは、また違う感想を抱くと思う。学校の友達とリラックスした中で体験できる空間が、より心に残り学びとなるだろ

	う。引き続き力を入れて事業を進めてほしい。 ● このような活動を実施していること自体は寄与していると言える。しかしながら、内容（コンテンツ）については、先述したとおり、プロデュースが極めて重要である。ヴァイオリニストなどの演奏者は、専門的な音楽活動を行うプロであって、言わば専門外のアウトリーチ活動の制作を含めて担うには限界がある。まず出演者や音楽ジャンルを決めるのではなく、はじめにコンテンツを制作するべきである。そのためには、全体の中でどんなコンテンツとするのかということや、具体的に音楽分野で言えば、芸術的に意義のある作品を、子どもにも理解しやすい工夫を凝らした一貫性のあるコンテンツを制作してから、それに相応しいジャンルや出演者を選定すべきではなかろうか。 ● 既存の枠組みや流れで活動を実施することにこだわらず、ゼロベースで、文化芸術で育成された堺市の子どもが大人になった時のイメージを描き、それを市民が共有できるよう努める必要がある。そこから逆算して検討すれば、アウトリーチ活動が担う役割が見いだされ、その目的に沿う堺市独自のコンテンツづくりにつながる可能性がある。 ● 人口、市域とも巨大な政令市の中で、いわばパイロット事業として始められた意義は高く評価したい。ただし実施件数は全体の数パーセントであり、また事業の継続性と発展性がどのように制度設計されているのか、またその目標はどこにあるのかが不明確に感じる。単発のアウトリーチのアウトカムは、ほとんど測定できないだろう。例えば、フェニーチェ堺でのオーケストラ鑑賞を中心に、そのプレとしてアウトリーチを位置付け、好奇心を喚起した上でオーケストラの鑑賞能力を高め、またアフターとして、定期的に鑑賞できるバウチャーなどを発行すれば、将来の良き観客の開発に繋がるだろう。友達同士で劇場やホールへ行くことがクールになるような機運を醸成できれば、堺市の文化政策としてのアウトカムは向上すると思われる。 ● 音楽家のキャリアの紹介を、一般的なキャリア教育に紐づけることは、あまりに特殊であるがゆえに無理があるだろう。あくまで「創客」が、「人づくり」と「社会づくり」に繋がり、また芸術文化そのものの「支え手」にもなるという、「三方よし」の文化政策が重点になると思われる。

■重点的方向性３　多くの人に魅力を伝える

重点的方向性		評価指標	現状値（令和2年度）	目標値（令和7年度）
3	多くの人に魅力を伝える	山口家住宅、清学院、（仮）堺鉄砲鍛冶屋敷ミュージアム来館者数	7,651 人／年※3	30,000 人／年
		文化芸術事業の認知度が 30%を超える事業数	3	10
		先人顕彰事業の参加者数 （さかい与謝野晶子青春の短歌大会参加者数 及び阪田三吉名人杯将棋大会参加者数）	6,616 人／年	10,000 人／年

※3　（仮）堺鉄砲鍛冶屋敷ミュージアムは 2023 年開館のため、山口家住宅、清学院の来館者数

評価対象	堺 アルフォンス･ミュシャ館作品企画展示事業
実施主体	堺市、指定管理者（堺市文化振興財団）
事業概要	市民に対する質の高い文化芸術の鑑賞機会の提供及び市民文化活動の場の提供を目的として、世界有数のコレクションであるアルフォンス・ミュシャコレクションの企画展を開催する。
調査概要	日程：令和 3 年 10 月 20 日（水） 内容：企画展：ミュシャ芸術博覧会の視察 場所：堺 アルフォンス･ミュシャ館
委員からの評価	＜事業の評価について＞ ● 他の美術館と違って、ミュシャのみを、テーマを変えて展示されていくことは非常に難しいことと思われるが、複雑な建物を上手に活用して、飽きさせることなく、写真撮影できるスペースやぬりえ、ＶＲコーナーなど、来場者参加型のものもあり、工夫されている。学芸員の説明もわかりやすく、「むしゃむしゃミュシャ」という冊子なども子どもたちの非常に興味を引くキャッチコピーであり、内容もアニメを彷彿させるかのようにミュシャを捉えていて、子どもたちの心を捉える内容である。所蔵されているミュシャの素晴らしい作品を工夫を凝らし、その魅力を伝えるべく努力されていることが非常にわかる美術館であると思う。 ● 当館の企画展示事業は、とても工夫されている。今回は、子どもに向けた企画ということもあり、子どもが興味を持つような仕掛けがたくさんあった。それにより大人もいつもと異なる視点で観ることもでき、作品の楽しみ方を気づかせてくれている。教育委員会と協力することで、子どもとその親に訪れるきっかけが生まれたり、別の企画でも他の団体や行政と協力し合うことで、知名度を高める努力をしているのは評価できる。次から次へと企画を出せる素晴らしい美術館であると思う。 ● ミュシャの初期から晩年に至るまでのコレクションがあり、油絵･リトグラフ･挿絵など多岐にわたる作品を保有している。年に 3 回行われるという企画展は近年若い学芸員が入ったことから、大変面白い内容になっている。子どもを美

	術館に取り込むアイディアも面白く、冊子や展覧会のデザインや構成も魅力がある。VR や映像での案内もあり、テクノロジーの利用も行っている。 ● ミュシャの作品を体系的に収集してあることから、社会的認知の高い作品のみならず、芸術家としてのミュシャの生き方までが想像できる展示がなされており、質の高さが伺えた。ミュシャが活躍した時代に通じており、パリにおけるポスターから美術作品までに至る街全体の雰囲気を体験したことのある鑑賞者にとっては、かなり充実した展示内容であると実感できるのではないかと考えられる。 ● 油彩画やポスター、アクセサリーやブロンズ像など幅広いジャンルの作品が展示され、ミュシャの多彩な才能が感じられる内容である。一人の作家の作品だけで、年３回の企画展を開催し続けるのは、企画面でかなり大変だと思うが、切り口、見せ方に工夫があり、ミュシャの世界観を楽しめた。 ＜留意点＞ ● 充実したコレクションと魅力ある企画が、多くの方に認知されない状況が大変残念である。一番の問題は場所である。交通の便は良いが、美術を鑑賞するという雰囲気が建物に備わっていない。駅から文化館までの道のりも文化を楽しむ雰囲気もなく、周りに一息つけるおしゃれな喫茶店や並行して鑑賞する文化施設が存在しない。ハード面は変えられないとすれば、宣伝・広告に力を入れる必要がある。展示内容のアイディアが改善されている中、企画展を如何に認知してもらうかが課題である。 ● 鑑賞者の拡大については、「敷居を下げても質は上げる」必要があり、バランスが難しい。現状の市民を対象として、彼らが将来の鑑賞者となるよう育成していく姿勢が大切なのではなかろうか。例えば、賛否両論あるにしても、ミュシャ館に限らず、堺市全体で、芸術に触れることを家族の行事化する動機付けとなるような制度設計（バウチャー、各種特典、物販など、若干商業的要素とも結びつける）があっても、新規鑑賞者層の開拓には有効ではないかと思われる。 ● 全国のミュシャファンにはもちろん知られた存在であるとは思うが、ミュシャ館の一般的な認知度はまだ高くないように感じられる。魅力的な展覧会を開催しているものの、広報下手な印象は拭えない。ミュシャは演劇のポスターで世に知られた芸術家でもあるので、演劇ファンが足を運ぶフェニーチェ堺と連動したイベント（レプリカを使った小さなミュシャ館をロビーに設置するなど）を行ってみてはどうか。企画展はもちろん、ミュシャ館自体の広報活動に一層力を入れるべきである。昨今はＳＮＳなどでの情報発信が盛んであり、重要な告知のツールとなっている。ミュシャ館も Twitter やインスタグラムなどの公式ＳＮＳを開設しているが、YouTube チャンネルに関しては動画の投稿が少なく、10 月 25 日に投稿された動画の前は今年 5 月と 5 カ月の間隔があいている。企画展の開催に合わせて、内容を分かりやすく紹介する動画を配信するなど、投稿頻度を上げた方が良いのではないだろうか。
事業の重点的方向性への寄与	● 多くの人に魅力を伝えるという点においては、少なくとも美術館に入った人には十分に魅力が伝わっていると思う。ただ、認知度に関しては、もう少し努力

	すべき点が多い。遠くに行けない時こそ、近くにこんな素敵な場所があるということを伝えるチャンスでもあるかと思う。 ● 「多くの人に魅力を伝える」という部分のスタート地点（周知・企画）は努力されているが、そこから本当に来場され展示を楽しむ方、リピーターへ繋げていくかは改善が必要と感じた。次回の展示は、神戸ファッション美術館と協力し合うということだが、他で開催される展示を訪れた人に、ミュシャ館へ来てもらうというのは、「多くの人に魅力を伝える」ことになるので、こういった取り組みを増やしていくといいと思う。 ● 多くの人に魅力を伝えるという意味では、せっかくの素材や企画が伝えることにつながっていないことが大変残念である。企画が充実してきた中で、認知度を上げる広告と宣伝が必要である。 ● 「魅力を伝える」という部分については、かなり寄与しているが、それは実際に来館した場合であって、「多くの人に」の部分は更なる工夫が求められる。例えば、鑑賞者を属性ごとにターゲット化して、集中的なアプローチを行う期間を設定する等が考えられる。現在は、子どもに焦点を当てて展示位置の工夫や「塗り絵」なども取り入れており評価できるが、可能であれば、鑑賞教室の一層の増加や仮に学校や学用品にミュシャのデザインを取り入れるなど、身近に馴染ませることも一案となろう。 ● 夏休み期間の開催ということで、入館した子どもたちに「むしゃむしゃミュシャ」と題した鑑賞ブックを配布し、子ども向けの遊び心がある作品紹介や展示の仕方も加えるなど、若年層にアピールする工夫が施されている。小・中学生の鑑賞教育や、レプリカを持参しての小学校への出前授業、子ども向けワークショップも実施。幅広い世代にミュシャ作品の魅力を伝える努力がなされている。

おわりに

今年度視察した各事業はそれぞれの重点的方向性に寄与する内容となっていたが、次年度以降に改善すべき課題もいくつか見受けられた。各重点的方向性の評価指標に対する審議会の主な意見は以下のとおりである。

（1）重点的方向性 1：文化芸術とともに生きる

「文化施設実施事業」は、市民が文化芸術事業を鑑賞するだけでなく事業にも参画する等、市民に文化芸術活動を行う機会を提供するものであり、「文化芸術とともに生きる」という方向性への寄与が認められる。公益財団法人堺市文化振興財団が実施する「社会包摂型事業」においても、今年度は、社会福祉協議会と連携して実施した子ども食堂での視察事業だけでなく、聴覚高等支援学校生を対象とした文楽鑑賞及び人形解説ワークショップを実施する等、様々な困難を抱えている人々や支え手となっている人々など幅広い対象にリーチすることができており、文化芸術を通じた社会的課題の解決という観点からも同方向性に寄与する取組であるといえる。

他方、地域文化会館の地域における文化芸術拠点としての機能強化に向けては、フェニーチェ堺、各文化会館・文化施設間での事業実施に係る職員同士のノウハウの共有や研修における相互の交流等、更なる連携強化に取り組まれたい。

（2）重点的方向性 2：文化芸術で子どもたちを育てる

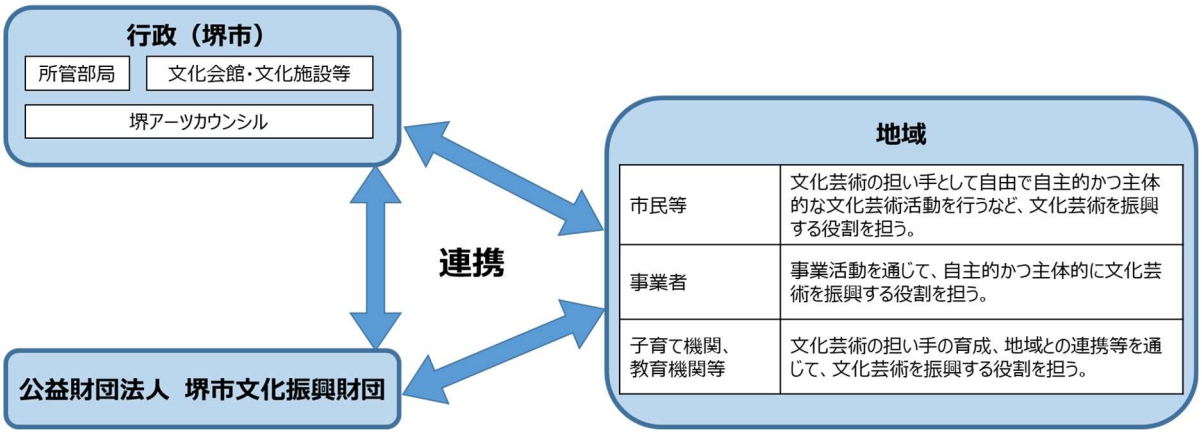
「さかいミーツアート」は、学校という場で子どもたちがリラックスして文化芸術に触れることができる貴重な機会を提供する事業であり、「文化芸術で子どもたちを育てる」という方向性に合致した取組である。また、分野によっては、若いアーティストが助手として参加しており、子どもたちの育成に寄与する次代のアーティストの育成にもつながっている。

このように、授業単体についてみれば優れた効果が期待できるものの、事業全体の重点的方向性への寄与という視点からは、実施校数が不足している点や偏りがある点は課題であると考えられる。また、実施分野についても、特定の分野に偏ることなく、幅広い分野について実施することが望ましい。次年度以降、新規実施校開拓及び幅広い分野での実施が可能となるよう検討されたい。

（3）重点的方向性 3：多くの人に魅力を伝える

「堺 アルフォンス･ミュシャ館作品企画展示事業」は、アルフォンス･ミュシャという一人の画家の作品を、年 3 回テーマを代えて展示していくという事業であり、ともすれば単調となりかねないところを、来館した幅広い年代に魅力が伝わる工夫を凝らした展示がされており、「多くの人に魅力を伝える」という方向性に沿った取組であるといえる。

このように、来館者にはミュシャ作品の魅力が十分に伝わる内容となっているが、より多くの来館者を確保できるよう、館自体の認知度向上のための方策を検討する必要があると考えられる。

以上の課題解決に向け、堺アーツカウンシル、公益財団法人堺市文化振興財団、市民、事業者等が相互に協力しつつ、より妥当性・有効性の認められる事業実施に向けて、また、第 2 期計画の目標達成に向けて、適切な事業目標、事業手法、事業のプログラム内容等を十分に検討の上、事業の見直しを進められたい。

（参考）関係図